

生徒主体の学習評価を通じた授業改善の在り方

～一人一台端末で作成する評価履歴の活用～

講 師：早稲田大学 田中博之先生

開催日：令和6年6月7日（金）

（「****」部分は、文字起こし不明部分です）

本校に本日お呼びいただきまして、ありがとうございます。富山県はたくさん呼んでいただいている、昨年も市のセンターの講演会や、黒部、魚津、高岡も何度も呼んでいただいていますので、富山県の先生方とは大変お近づきにさせていただいていることをありがたく思っております。

今日は初めて本校を訪れたのですが、生徒さんたちは大変挨拶も元気よく、そして、附属だからといって知識だけでなく、理科の授業を見せていただきましたけど、科学的に探究する態度の時間、探究というのがしっかり入っているわけですが、仮説を作る、間違っても堂々と発表する、違うなと思ったらきちんと反論する、そしてまた答えていくといった科学的な討論を非常に楽しんでいるし、生き生きとしているし、先生も伸び伸びとそれができるように豊かに助けている。

また、どの教科も教科書にない教材を、国語も美術も、いろんな教科で新教材といいですか単元というか、開発する力も大変おありで、素晴らしい学校でいらっしゃるということが本当によく分かりました。ありがとうございました。

今日はたくさんの資料をお持ちしております。このレジュメ集を見ていただきながらメモでもお取りくださればと思います。今日の話なのですが、本校は「深い学び」の研究をしておられるので、ちょっと最初に導入で、「深い学び」について私なりの考え方もございまして、今日授業を8つ見せていただいて思ったことも少しございますので、お話をしてから本題に入りたいということをお許しいただければと思います。

宣伝で本当に申し訳ないんですけども、私も「深い学び」については、中教審答申が出てから8年ぐらいですか、ずっと研究をして本も出しておりますので、この本をどのような考えで書いたかということをお話ししていきたいと思います。

本校は「見方・考え方」はもちろん研究しているし、素晴らしいことですが、ただ、文科省が出している例は分かりにくい。これを本校はできるだけ分かりやすくなるように、各教科で、特に体育の「する、みる、支える、知る」はよく分からないところもありまし

て、応援合戦ばかりやっている学校もあるわけですが、本校はそれぞれの段階で何をするのか、何を見てとり、何を考えるのか、しっかりと表にして分類していますので、私自身、本校で各教科の先生方が分析している「見方・考え方」はとても分かりやすいなと思って。文科省はまだ曖昧で、国研も理科ぐらいしか具体例を出していないのに、本校は出しておられて、すばらしい研究の成果を4年間培ってこられたと思いますが、でも、基本的に難しいですよ。この「見方・考え方」というのは、教科の固有の認識の在り方を問うているので。実際あれは高等学校で最初につくっているもので、それを小・小に下ろし切れていないので、非常に抽象的です。難しいです。

ですから、私は前から、本も2冊出していますが、フィンランド・メソッドの研究をしているので、やはり「見方・考え方」、つまり認識の仕方だけを子供たち、生徒に教えても使いこなせない。そこには使いこなすための学び方、いわゆるhow to learnがないと。学びの技法といって20個を私は提案して本を書いたわけですが、これを併せて両方やらないと、最終ゴールだけを見せても、本校さんのお子さんは大変能力が高いのでやりこなしていましたけれども、公立学校の先生が見られてもなかなか同じようにはいかない。ですから、フィンランドでこの学び方というのを提案して、それでPISA型読解力で世界一にフィンランドはなりましたね。それをまねではないですが文科省も参考にして、前の指導要領から活用を図る学習活動が入ったり、全国学力調査、これは私も委員を2007年から12年間務めて各学力調査を作ってきましたけれども、B問題と言われるいわゆる活用問題、記述式の文章題がたくさん出ていますね。私が辞めてから3年たちますが、もうほぼ全部が全国学力調査の大問はB問題になっちゃいましたね。こういったものも作って、アメリカ、イギリスはディープラーニングという理論もあるのはある。私が今研究している、またリバイバルしたいんですが、大村はま先生の考え方とか、浅い学びになってはいけないといういろいろな防止の必要性からこの「深い学び」が出てきているんですが、どうも「見方・考え方」だけでは生徒が働かせるということができない。その方法まで教えたいと思ったんですね。

それで、今からお手元の、最終ページにとじ込んである資料ですね。これをご覧いただきたいんですが、20種類の「見方・考え方」を働かせる方法が書いてあります。具体的に生徒が取り組める活動例が書いてあります。これも一覧表になると漢字ばかりなのでちょっと難しいのですが。でも、きちんとデータに基づいて考察を深める。今日は特に社会科がすごかったですね。資料が教科書以外で、十二、三枚でしたか。ちょっと間違っていた

らすみません。恐らくそれぐらいの種類の資料を生徒が読解して組み合わせながら、自分で大航海時代のいろいろな特徴が、人々を幸せにするためにポジティブに働いたのか、逆にネガティブに働いたのかを説明する。多面的・多角的に考察する。できていますよね。すばらしいですね。

資料やデータから原理や法則を発見する。これはどれでもやっていましたが、理科などでもきちんと発見のために、今日は間違った仮説もあって楽しかったですが、どんどん討論しながら、これからまた新しい原理を発見するんでしょうね。今日はその途中を見せていただきました。

資料を比較して、これも社会科はやっておられましたけれども、国語もビデオの映像とミュージックビデオの歌詞の、最近の若いシンガーソングライターさんでいらっしゃるんですか。その歌詞と映像とを比較しながら、映像にだけあって歌詞にないもの、歌詞にはあるけど映像ではちょっと曖昧で象徴的なものを比較して解釈を深めるというAI時代のマルチモーダルな情報分析、比較分析をやっておられましたよね。対話はちょっと少なかったかな。ペアトークをよくやっていらっしゃったのは英語なので、自己紹介のスピーチあるいは対話の様子のよさを、グッドポイントを取り上げている。これも英語はやっていらっしゃいましたね。

あと、自己評価、相互評価の練り上げがあまりなかったですが、でも多分、家庭科の幼児のおもちゃの作りかけのものを今度はもっと良いものにとという話し合いをしていましたし、あと、視点を転換して複数の観点、これも国語で、私から見るのか、ワンちゃんの——レオでしたっけ——から見るのか、女の子のほうから見るのか、視点を複数設けながら多面的に分析するとかいろいろあったわけです。今日、「深い学び」の私が提案している、お手元の資料に全部で20個ありますね。これを1つの単位では3つか4つぐらいでいいです。20個全部はできませんし、教科によって多く使うものと使わないものがあると思います。教科ごと、単位ごとの組合せパターンというのはまだ出していないので、よかったらこういった学び方の研究を併せてやっていただくと、生徒が使いこなして、「見方・考え方」を具体的にこの方法に乗せて発揮できて働かせていくというのが望ましいと思っているんです。これですね。ぜひここからいろいろ取り出してみてください。

余談ですけども、今、お隣の新潟県の県の中教研でこの20個の学びの技法を3つ、4つ、単位と組み合わせながら「深い学び」を実践するというのを、今後3年間の研究テーマ、全県の中学校——100校ぐらいありますかね——でやるということが決まって、今年取

り組んでおられます。ぜひそういったことも考慮していただきまして、学び方というのを少し研究していただければと思います。

ちょっとだけ事例をお見せしますね。これは横須賀、先生方はあまり行く機会はないかもしれませんが、ある中学校の歴史分野。室町時代とはどんな時代なのか、この間に答えるために、8時間ぐらい通常の講義はします。一斉授業をしてもいいんですね。だけど、プラス2時間かけまして、これはタイムマネジメントと言いまして、****はマネジメントするのはカリキュラムだけだと言いますが、いやいや、私はタイムマネジメント、主体的・対話的で「深い学び」をやって、「見方・考え方」を働かせる時間が必要ですので、プラス1時間、2時間、教科書の標準配当時間数より増えていかなないとなかなかできないですね。

だから、主体的・対話的で「深い学び」がフルスペックで入るフルメニューのフルコースの授業というのは、私は学期に1単位しかできないと思います。あとの単位はちょっと講義が多かったり、教師主導でもいいですよ。全単位なんかできません。時間がないからです。ですから、この単位を実は2時間増やしているんです。

「深い学び」は、根拠を明確にして、ここには書いていませんけど、資料を引用して、多面的・多角的に考察をするということを生徒に求めたわけです。宿題が出まして、宿題も公立ですから歩留りが悪いんですけどね。でも、こうやって班で発表して拍手をもらえて見詰めてもらえるからやってくるんですね。野球部の子はちょっと土日はかわいそうですね。

こんなものです。フォーマットをある程度整えます。4つの分野からテーマを1つ選び、これは生徒による、今はやっている自己選択の原理ですね。室町時代から協力……。これはテーマはサンプルも出していますが、生徒が決めていって、自己決定の原理。理由を100字ぐらいで書こう。文書による言語化というのを必ず頑張ってやってもらいます。そして、根拠となる資料を引用する。これは教師がそろえますけどね。今日、社会もそうですね。生徒がそろえたら総合的な学習の時間が必要になりますから、教科では時間がないので、生徒がそろえるというのはちょっと無理です。

これは面白いんですよ。室町になって初めて集団農法が盛んになり、鉄器具が発明されたので、牛にくわとかすきの鉄器具を引かせるので、集団での農業が発達した協力の時代だと言うんです。知りませんでした。

右側は、人糞を集める人、それを業者が農家の方に売って、有機農法リサイクルシステ

ムが確立したのが室町。知りませんでした。生徒のほうがよく知っていますよね。私が知らないことがいっぱいある。これを資料を引用しながら根拠を明確にして、理由を言語化しながら多面的・多角的に説明していますよね。すごいですね。「深い学び」も3つぐらい入っています、学び方のほうは。「見方・考え方」は、これは歴史ですから、物事の因果関係や時代の特徴を時間的推移を基にして説明するんですよね。これも本校で今日やっていらっしゃいました。こういうことを学期に1回でいいんです。1単位。あとは本校も受験勉強がありますからね。だから、そんなに全部改革したら大変なことになります。教科書が要らなくなります。

こんなことを私は1つ「深い学び」だと思って****の先生と一緒につくってみました。「発明の時代」、こんなキーワードもいいですね。ある意味、個別最適な学びですから、こういう個が一人一人責任を持って自分の作品を作ってくる。この個別最適な学びの個による自力解決の場面がちょっと少ないかもしれませんね。もうちょっと作品とかにしてプレゼンしたりスピーチしたり提案したり、グループで協働的な学びの一体的な充実ですから、そういう協働での練り上げ・修正、この場面が本校の授業でも来年度に多く見られるといいなと思っています。これをまたグループで練り上げて、「革命」という新しいキーワードを発見しました。ほかに「団結による戦いの時代」。この頃からだんだん、鎌倉もそうでしょうけど、職業軍人というのがだんだん確立してきた時代ですよね。私もよく分かりません。あんまり言うと失敗して知識がないことが分かっちゃいますけれども、変化の時代というのか、民衆が奮起していくという時代になってきているらしいです。

そんなことで、9班全部そろって、これは全く統一することはありませんけれども、個別最適な学びで、個がしっかり責任を持って発表シート、自分の考えシートを作ってくる。そして協働で練り上げて。今日、理科もそうしていましたけど。だから、そういったことを少し増やすのもいいのかもしれないですね。

一斉授業は基本のところを8時間やってもいいんですが、この先生はやっぱり資料活用能力をふだんの講義形式の一斉授業でも育てているのがノートを見たら分かります。穴埋めだけじゃありません。記述というか、書く力、言語化の力、100字ぐらいですかね。きちんと文章にして表現するということも求めています。通常の公立学校ですね。

こういったことをきちんと学期に1回でもやれば、1年間に3回、3か年で、公民、地理、歴史、いろいろ変わるでしょうけど、9回、それが9教科あったら $9 \times 9 = 81$ 回というすごいことになります。こういったことも1つのやりようでしょうか。

もう1つ、理科で、これは犬山市という愛知県の中学校ですね。私も全国を回っていますのでたくさんの事例を収集していますが、これはイオンのところで、より強力な電池を作るにはどうすればいいだろう。電極の種類・面積、水溶液の種類・濃度、いろいろと変化させながら、どれが要因として電流を多く流すために必要なのかということを考えていました。これは同時共同編集機能、大変話題になっていますが、Google Jamboardですね。年内で期限が切れてしまいますから早く違うのを使わなきゃいけません。でも、これはおとしの授業なのでGoogle Jamboardを使えましたから、こういう既有知識を活用し、一人一人が付箋紙を書き、それを4枚、5枚、グループで合意形成。合意形成って特別活動だけじゃないですよ。いろんな教科で合意形成が「深い学び」には必要ですよ。一番これが科学的に正しいと思われる仮説ですから、間違っているかもしれません。それを大きく膨らませてグループプレゼンをするという。仮説設定だけで1時間取ります。めちゃくちゃゼいたくな授業です。でも、こうやってやることで、仮説をつくる时候にも既有知識を活用しながら、資料に基づいたりしながら、グループ合意を形成しながら自己決定していく。集団決定かもしれませんが、そういう学びを仮説段階で1時間取る。普通この辺は先生が板書して写せか、3分ぐらいで2人ぐらいのちょっと学力の高い子に当てて、ぱっぱと答えるというのを先生方はやっていますよね。1時間取るんですね。この子たちは、銅または亜鉛と。種類ですね。ほかのグループの考えもメモしながらですが、ちょっと立ち歩いてもいいよということで、いろんなグループに偵察団を派遣して、どれが正しいかは実験で確認されますが、これは本校でもやっておられますけど、これは国研が出しているんですね。国研は理科だけはきちんとやっているの、使いやすいものが出ています。「見方・考え方」ですね。他教科も出してほしいですよ、全教科を。

ルーブリック****ますけれども、自己評価用ルーブリックがありまして、本校は生徒さんによる自己評価、他者評価——相互評価——のためのルーブリックをぜひ次、研究していただきたいです。ルーブリック、教師がつけるのは当然ですけれども、子供がやりぱりつけてほしいですよ。その子供が自己評価、相互評価をルーブリックでつけ続けることで、評価から授業改善、学習改善が生まれてくるという今日の話につながってまいりますので、このあたりで本題に戻りたいと思います。

今日は「一人一台端末で作成する評価履歴の活用」と題して話をいたしますね。

ちょっとそもそも論で、これは文科省が出している中教審の、大分前です。もう8年ぐらい前ですか。学習評価といっても問題があって、評価を書くけど書いて終わりで、一番

上の赤、学習改善につながっていない。先生方もそれを見ながら授業改善にはつなげない。「評価書いておけよ。はい、終わり」。だからどうするのという評価結果、評価内容について、次に生かすということが。無理ですかね、時間もないし、教科書の内容も多いし、すぐ中間・期末考査が来ますから、本当は悠長にできないですよ。

だけど、今日びっくりしたんですが、多分この中で見ているのは15人しかいないと思いますが、体育の松田先生ね。後でゆっくりお話を聞かせてください。体育は今日のバスケットボールの授業で、授業中にはしませんでしたけど、チャット、タブレットで今日のパスとかいろんなやり方を振り返って、オンラインで、クラウドでちゃんと評価履歴を残して、最後、体育のバスケットのマルチメディア型レポートを書かせるそうですよ。すごいですね。****の先生のを借りればマルチモーダル型ですか。すごいですね。ビデオつきのオンラインレポートを書かせるそうですよ。松田先生、後でまた教えてください。

そうなれば、評価をつけることが自分のいろんな試合用のパスの通し方、ゾーンが後ろから前へとか、横でとか、カムフラージュとかいろいろあるかもしれません。そういった改善、自分のスキルの改善につながっていく。そういったことのためにこつこつとオンラインで評価履歴を残している。体育は素晴らしいと思いますね。ぜひ見せてください。

あとは、挙手だけじゃ駄目ですよとかもいろいろあるんですけども、改善につながらない。評価のしっ放しで終わっているというところが問題なんですよ。

あとは、主体的に学習に取り組む態度が入ってきたといっても、これは学校教育法に書いてあるので実は古いんですけども、ここがまた分からないので、今日はちょっと具体的にご提案をいたしますが、今、体育科で提案しているようなオンラインでの評価履歴と評価レポートが——全単元は無理ですけど、重点単元だけだと思いますが——残っていれば、十分主体的に学習に取り組む態度は、ルーブリックが要りますけれども、評価できるんですね。その評価は授業中の評価ではなくて、要録記載が可能な評価になっていきます。文科省が言うところの評定に生かす評価になっていきます。そういったことを今日お話ししますね。

じゃ、学習改善につなげるってどうすればいいのということで、生徒が主体的に学習改善を行うには、学びと評価の一体化、これはどこかで聞いていない言葉ですか。指導と評価の一体化は文科省が言った言葉ですが、実は若い先生方、実習生の方もいらっしゃるかもしれません。指導と評価の一体化って、もう40年前の概念なんですよ。私が大学院の1年生ですから、今から40年前、私が24歳とか23歳でした。大学院の先生、私の恩師は中教

審の副委員長を20年務めた梶田叡一先生でした。梶田先生がまだお若い頃、40歳ぐらいのときに、文科省の****初等中等教育局長さんと一緒につくったのが指導と評価の一体化。40年前の概念。悪くないです。今でも必要です。

でも、私は恩師、梶田先生の弟子として、子供が、学習と評価でもいいですよ、学びと評価を一体化させて、中教審が言うように身についた資質・能力を自覚して共有することをさせなくていいんでしょうか。先生ばかりが、評価、評価、評価。点をつける、通知表、内申書、調査書、高校入試みたいな。大切です。そう、すごく大切。でも、生徒側にやらせていいんでしょうかということなんですね。

中教審は実は7年前に、主体的な学びの定義、上の5行は先生方はご存じですよ。下の4行があったのをほとんどの方はお忘れです。主体的な学びというのは、ハアハア言いながら、根性で、熱意を持って頑張るんだみたいなものだけじゃないんですよ。粘り強さだけじゃないんです。身についた資質・能力、あるいは見通しをもてば身につけたい資質・能力と、見につけられなかった資質・能力も自覚させてほしいですよ。いろいろあると思います。

自覚と共有というのは自己評価と相互評価という意味なので、メタ認知という言葉もありますし、自己調整という言葉を使っても、アメリカの理論が好きであれば、ぜひはやりものに飛びついていただいても結構ですが、日本的に言えば自己評価、相互評価、最近、他者評価と言うことが多いですね。子供同士という意味です。

これをやってと言っていたのに、主体的な学びの定義から抜けている。じゃ、抜けたのは誰が悪いのということになると、指導要領に書いてないじゃんみたいな。そうなんですよ。文科省は中教審で書いたキーワードが抜けているんです。これは非常に残念です。

でも、よく考えてください。指導要領には解説というのがあります。これも法令根拠があるので遵守義務があるんですが、そこの総則編に書いていました。本体には書いてないんですが、こう書いてあるんですよ。生徒による学習活動として、相互評価、自己評価でも工夫してください。それが意欲につながるからだからです。

ということで、今日は、法令根拠もございますし、本校ももっと生徒主体で自己評価、相互評価を先生方がお作りになったルーブリックを生徒が働かせて、自己評価して、相互評価して、学びと評価——学習と評価でいいですけど——一体化させて、生徒が自ら動き出す。評価へ動き出す。学習改善へ動き出す。結果、資質・能力を自分で身につける子供たち。その結果、資質・能力を自ら主体的に身につけようとする子供たち。もちろん協働

的な学びだから、グループで協働して、友達と協働してですね。

これは車の両輪だと提案したんです。左側は私の恩師の梶田勲一先生が、ブルームのマスターラーニングの理論化ですが、ご提案のあった40年前の理論。私はこの学びと評価の一体化を実は20年前から****で提案していますが、この両方を両輪にさせていただきたい。中心には資質・能力があって、それを評価規準にして、それが子供向けのルーブリック、先生向けのルーブリック、それは同じでもいいです。中学校は難しい漢字が書いてあっても生徒は分かりますのでね。

今日はこのいろんな方法の中でも、ルーブリックはちょっとお勧めです。今日は詳しくお話をちょっとだけします。ルーブリック、分かっております。作るのが面倒くさい。どこに時間があるんだ。私も夏休み、この五、六年間ルーブリック研修をいっぱいやってきましたが、先生方に常に怒られています。負担を増やしてすみません。働き方改革があるのに。でも、これは実例は今お見せしませんが、私は今、早稲田大学の大学院の教職課程で修士号を取る、あるいは****に通う学生たちを教えています、ChatGPTで30分あったら1枚作れます。有料版ですよ。無料版は駄目です。全然使いものになりません。1か月3,500円ぐらいです。作ってぱっとやめればいい。OpenAIのサブスクは1か月ごとですから、3,000円でだーっと10枚ぐらい作ってぱっとやめれば3,500円で10枚作れます。そのやり方は、よろしかったら早稲田で夏休みにまた今年も研修会をしますので、来ていただいたらと思います。ちょっとそれは余談ですけど、ChatGPTを使わなかったら1枚作るのに2時間ぐらいかかります。それが30分ですから、働き方改革ですね。

ということで今日は、「評価セッション」と私の理論では呼んでいます。本も出ていますが、授業中にきちんと評価の時間を取って、3分でつける振り返りだけじゃなくて、しっかりと。といっても何時間かと言われると困るんですが、3分ではなくて10分、15分しっかりと単位の中で時間をつくりたい。あまり入れられませんけれどもね。そんな時間を授業でつくってみた成果をお見せいたします。

今のような生徒主体の自己評価、相互評価を繰り広げて、自ら資質・能力を身につけ、学力もつけていくという、そんな学び、いろんな目的・機能があるわけですが、今日は「深い学び」にもなりますけれども、ここに書いたようないろいろなもの、効果として挙げられるものを挙げていきます。今日は観点別の話はしません。要録記載の話は今日はしません。今日は生徒主体ということでお話をします。

今日は、いわゆるパフォーマンス評価とか作品評価、レポートとかスピーチとかプレゼ

ンとか、そういった思考・判断・表現をしっかりと観点として見とるための評価にルーブリックを使いませんかというご提案です。

例えば、まずはルーブリックを使わなくても、大切なのは資質・能力を可視化することです。生徒にです。本校はルーブリックを作っておられますが、恐らく生徒さんにはどうですか。全教科は調べていませんが、生徒さんに見せていますか。生徒さんにつけていますか。それを学習に入る前、ビフォーと、終わった後、アフターで、所ジョージさんの「大改造！！劇的ビフォーアフター」のように、ビフォーアフターでルーブリックでAが1個増えたとか、B・B・BだったのがB・A・Aになったとか、そういう自己の資質・能力の習得レベルの向上を可視化・意識化させていますかというお話です。

ルーブリックじゃなくても、本質は資質・能力の可視化とその成長過程の可視化ということなので、例えば国語です。今はこれから採択時期に入るので、附属さんであっても微妙な時期なので会社名は言えませんが、ある教科書会社、国語です。3学期の末の単元は、言葉の力、どんな力が身についたのか振り返って、1年生、2年生は1年間、3年生は3年間。昔の記録なんかは振り返られませんが、フリップにしたりプレゼンしたりしながら、自分の言葉の力の成長を発表して、みんなで認め合う会をしよう。これは5時間単元ですよ。

手を挙げろとは言いませんが、中学校の国語科の先生のほぼ90%以上がこの単元を飛ばしています。だって、入試があと1週間で始まるときに、こんな悠長なことをやってられませんよ。3年生だったら過去問を解いていますよね。だから、必修なのにほとんど飛ばしているんですよ。よくないです。

ということで、新潟市の某公立中学校の先生に頼んで、「お願いします。やってください。」と言いました。この先生自身も、「今までやったことない。飛ばしていた。」と言っていました。でも、3年間は振り返られないので、1年間にしました。こうやって3年生で学んだ国語の、ルロイ牧師の「握手」という物語と、「故郷」というルントウの鲁迅さんの物語を、この子は2つ選びました。

内容のことについて書くんじゃないんです。資質・能力をどれがどのようなプロセスで身につけたかをメタ認知して書きなさいということです。そしたら、こちらの記述を見ると、ルントウの心情の変化というのを具体的にたくさん書くわけじゃなくて、人物の性格の移り変わりを考える力と、情景から何を象徴しているのかを考える力が身についた。自己評価ですから、甘いも辛いもあると思います。その辺は何回かやりながら、だんだん教

師の評価と生徒の評価がずれないようにしなきゃいけませんけど、急がなくていいです。

1年、2年かけてゆっくりすり合わせをしていけばいいんですが、そのためのプロセスが書いてあります。いわゆるジーマンさんが言うところの自己調整学習理論のメタ認知的モニタリング、ちょっと難しい話をしてすみませんが、簡単に言うと自己評価ということです。意識化して可視化しているということです。こういったことを資質・能力ベースでしっかりとレポートにする。だから、今日、体育の松田先生がバスケットボールでそれをやって、しかもクラウドでやっている。デジタルで、オンラインでやった。

これはやっていません。手書きです。アナログです。作られた物語を****は、中心部分と付加的部分に分けて、その関連性からその文章の意味を深く理解する力がついたそうですよ。すごいですね。自分で語れる子供を育てる。

じゃ、ちょっとビデオを見てみたいと思います。どんな発表会になっているでしょう。

〔ビデオ視聴〕

すてきですね。3学期、3年生の終わり、これが最後の授業でした。この後、生徒さんからチョコレートをもらっていましたが、多分卒業式ではわんわん、涙、涙の感動の卒業式だったと思います。

資質・能力を自覚し共有する。あの中教審の味気ない活字で書かれた2行、3行が生きた授業としてイメージしていただけますか。教科書にあるので、なぜやらないんでしょうか。分かります。入試があるからですよ。でも、こういったことを、せつかくあるのでやっていただく。ただ、他教科はこんな時間は教科書に載っていませんのでできないです。総合的な学習の時間でやってもいいかもしれません。資質・能力成長発表会とかという題でやってもいいかもしれませんが、できれば特活の時間に今は3時間キャリアパスポートを作る時間がありますよね。その3時間の中で生徒が1教科、自分が得意なものを選んで、同じようにやってもいいんじゃないでしょうか。その辺、特活の工夫もしていただければと。

今、****ちゃんが言っていたこの広告批評で、こんな広告の分析をしたという作品も残っていますから、それをちゃんと先生が国語科準備室から捨てないで持ってきている。あるいは生徒が書いた自分の作文とかノートを全部持ってきて、エビデンスに従って発表しているんですよ。「盛って」とか「うそで」とかじゃないんですね。こういうことをやっているのがまず大切で、これをこれからルーブリックできちんと判断基準——私は判断基準と呼んでいます。文科省は判断できる状況と呼んでいますよね。状況か基準かというの

はどちらでもいいんですけども、私はA基準、B基準、C基準を全部明示すべきだと思っていますが、文科省はB基準だけ示して、それより上とかそれより下とかでA、Cでいいですよと言っています。そうかもしれませんが、一応アメリカでもフィンランドでも韓国でも、もう今は世界中ルーブリックを中学校はやっていますので、一応A、B、Cは示したほうがいいと思います。世界標準ですから。特にヨーロッパのバカロレアスクール、東京もたくさんバカロレア指定校が日本でも増えてきていますが、全部ルーブリックです。ですから、何で文科省だけB基準しか示さないのというのは、世界からはちょっと違うやり方なんですけど大丈夫ですかという感じです。

ルーブリックはこういう特徴があります。詳しくは、もう時間がないので本を読んでください。いろんなタイプがありますが、今日は作品評価やレポートあるいはパフォーマンスのね。パフォーマンスというのはスピーチとか運動の技能とか歌を歌う歌唱とか楽器演奏です。今までそういったものはルーブリックがなくても先生方はつけていたと思いますが、これからは説明責任が生じる時代です。保護者も生徒もやっぱり今は評価が厳しくなっているし、高校の調査書にもきちんと載って、しっかりとそれが評価される時代によくも悪くもなっていますから、評価づけになったりもしますね。生徒さんはちょっとかわいそうなところもある。だけれども、しっかりと基準があるんですよ。ルーブリックを作って、これに従って、基準に従ってしっかりとやっていますよ。エビデンスはあなたのこのレポートですよ。エビデンス——スピーチのエビデンスはビデオだから、今の時代はタブレットで撮ればすぐ撮れますよね。あとは基準表があるんですよって、こうやってやっていけば生徒さんもある程度納得できるし保護者も納得できますが、東京は大変なところで、世田谷区なんかは大変保護者が意識が高いので、公立で都立日比谷高校さんというのが都内トップの進学実績校で、現役で早稲田に40人、50人という、とんでもなく……。開成には勝てませんが、麻布とどっこいどっこいぐらいの公立学校のトップ校があるんですが、そこに行けるか行けないかというのは世田谷の中学校の保護者ってめちゃめちゃ気にするので、主体的に学習に取り組む態度がBでもつこうものなら、もう日比谷は行けなくなるので、校長室に説明を求めに来るそうですよ。

でも、ルーブリックの基準表を見せて、生徒さんのレポートのコピーを見せて、ビデオでもいいですよ、これでちゃんと教科部会で合意した方式に基づいてやっていますと言ったら、お帰りいただけます。それがないと、もめます。「指導主事を出せ」とか、「教育委員会は何かやってんだ」。先生方は世田谷には住まないほうがいいと思います。本当に怖い。

みんなどこも怖いですよ。文京区も怖い保護者がたくさんいらっしゃいます。真剣にお子さんの将来を考えていると、よく言えばそうですけど、説明責任を求める声を保護者が上げてというのは残念なことですけどもね。そういった意味では、ChatGPTで1枚30分で年間3枚でも作れば、きちんと説明責任も果たせます。

説明責任という話だけはちょっと世知辛い話なのですが、児童・生徒にとっての目標値になるということをご理解いただきたい。今からいろんな種類をお見せしますが、ループリックというのは、レベルAが書いてあって、Bが書いてあって、Cが書いてあって、一覧表になっています。観点が3つぐらいあって。

最初にビフォーアフターと言いましたが、ビフォー、今日これからディベートやるんだとか、プレゼンやるんだとか、スピーチやるんだとか、何かダンスの演技やるんだとか、初めに目標値を決めて、これは前の年度は頑張ったけど、できないからB・B・Cぐらいかなとか。個人差はありますよ。A・A・A頑張ろうというのでもいいけど、B・B・Aぐらい頑張ろうかなみたいなのでやってみて、それより上だったら全然いいですけど、同じぐらいでもいいかもしれません。これは個別最適評価ですから。こういうループリックを最初に見せてつけると目標値になる。だから、中教審は学習意欲が高まると言ったんです。ただ、意欲だけではちょっと中途半端で、やっぱり学習意識あるいは目的意識、問題意識が明確になる。自分の成長目標が明確になるということです。こういったメリットもあるわけです。説明責任は本当に世知辛い話なので、ないにこしたことはありません。じゃ、事例をお見せしましょう。これがベストだとは言いません。ある県の、私の教え子たちが頑張っている……。早稲田の教え子は都内の中学校にいっぱいいます。

地理ですね。瀬戸内海の幾つかの県では過疎化をしています。瀬戸内海は大橋が幾つかできて、広島市とか岡山市とかそういうところはすごく経済的に発展しているんですが、徳島の山間部とか高知の山間部は物すごく過疎化して、もう限界集落だらけ。

そこを今、葉っぱビジネス、めっちゃ有名になっていますよね。平均年齢70歳のおばあちゃんたちが5人で会社を起こして年収1億円なんてあるんですよ。東京の銀座の料亭にカエデの葉っぱとかをきれいに洗ったものを売っている業者があるんです。そんなのを調べまして、グループでこういったパネルにしてというか、もっと大型ですね。その中に「見方・考え方」を入れて、地域の営みを地域間で関連づけて、瀬戸大橋ができたとか、人口流出があった、流入があったとか、それは人間の営みですから、そういうカエデなどの葉っぱビジネスなどの東京と徳島を結んだビジネス、物流、そういった関係性で説明するこ

とができるようにということで、グループでレポートを書かせています。これもしっかりと「見方・考え方」を働かせながら、でも方法論としては、さっきのように知識を活用して、今日の社会科のように複数の資料を組み合わせながら、多面的・多角的に考察できるんですよ。だから、「深い学び」の技法も2つか3つ入っているわけです。

こういった作品作り、そしてプレゼンテーション、こういったことも本校はもう少し生徒主体で作って、また研究を深めていただければとてもいいなと思っています。

「深い学び」の意識化のために、これは世田谷の中学校ですけど、私の教え子です。全部はお見せしませんけど。ループリックはこういうふうに「見方・考え方」ループリックというのを作ってみました。これはいわゆる思考力・表現力のほうですけど。レベルA、B、C。最初に1回つけて、終わった後につけて、その変容を基にまたレポートを書かせるというレポート課題。手書きなので、あまりデジタルを使っていません。

もう1つは理科の授業、これは私の教え子ではないんですが、神奈川県のある中学校です。理科の消化の単元です。こういうふうにして図式化して構造的に表現するというのも「深い学び」の私の技法の1つです。消化の仕組みをこういったパネルで表現し、スピーチ原稿の中に知識を活用しながら図で表す。モデル的・構造的に表現する。今日も理科はモデルをとっても上手に表現していましたね。間違っただけじゃなくて面白かったですよね。それをどんどん議論していましたね。本当に未来の科学者みたいな子たちでとっても素敵でしたよ。

この授業では、さっき言ったように個別最適な学びだと一人一人きちんとこういう作品を作ってくる。だから、また言うけど、野球部の子とかバスケット部の子はしんどいでしょうね。土日は試合があったのでかわいそうですが、頑張ってきます。

ちょっと話がそれますが、これは英語ではキャフオールディングと言って、日本語では足場かけと呼んでいる人が多いですが、理論はいろいろありますけれども、大村はまさんが言うところの学習の手引ですね。

やっぱり公立学校だと、そういう「見方・考え方」を活用したコミュニケーション、対話的な学びって簡単にはできないです。多分クラスで公立だと2人ぐらいしかできないと思います。本校は多分9割の子はできると思いますけれど。だから、その子たちのためにこういうヒントカードですね。何か補助輪みたいなものもちょっと見せる。これは見せ過ぎちゃいけません。丸読みしますから。でも、こういったものを生かしてちょっと工夫していってごらんという補助輪がないと、公立学校では「見方・考え方」を生かした「深い

学び」につながる学びの技法を働かせるなんてできませんので、ヒントカードですね。

ルーブリックは結構ちゃんと作ってしまして、ビフォーアフター、このプレゼンの前と目標値を設定。後でどれぐらい伸びたか。ここではあまりやっていませんが、目標値には黒鉛筆で〇〇〇とつけさせて、達成値、実現値、プレゼンが終わった後、赤ペンで〇〇〇とすると、黒と赤の変化で最後のレポートをまとめなさいと言ったら、生徒はすっと書けますよ。アクティブラーニングには3色ボールペンの原則というのもありますので、青も使ってください。青は先生による価値づけで使うといいですよ。3色ボールペンの原則でやってみてください。

こういうふうに教師の側がルーブリックを可視化しています。これを生徒が意識化して自覚的に自己評価、相互評価をするんですね。この先生はレベル1、2、3にしていますが、A、B、Cということですね。4観点、これは思考・判断・表現、あとちょっと内容が入っています。知識も入っていますけれど、これを可視化して理科室の教室に貼っています。大型モニターでしたしね。手元には、それで丸つけしてとか。この子は4つ丸。これは相互評価。友達からの評価で、理由を書いています。こういうふうにして自己評価、相互評価に自ら主体的に取り組むことで、丸がもらえない、自分でも丸と言えなかったところは、次、頑張ろう。あるいは、中間評価を入れる時間があれば、残りの2時間でもっとプレゼンを練り上げることも可能ですよね。先生から全部言われるのではなくて、先生のご指導半分、生徒自ら、そして生徒の協働的な評価で半分、両輪で動かす。今日の私の先生方へのメッセージですね。

これも私の教え子です。彼は今、東京の稲城市というちょっと西の外れのほうにある市ですが、数学で、携帯電話3社、A、B、C、どれが一番経済的かをグラフで考えてもいいし、連立方程式で考えてもいいしという、よくあるパターンです。

証明レポートを書いてきなさいという宿題で、ちょっとこれは冗長という感じかもしれませんが、それをルーブリックで相互評価して、このときには主体的に学習に取り組む態度の観点でルーブリックを作っています。数学は明らかに文科省が出している——先生方はご存じですよ——評価の観点及びその趣旨というPDFがダウンロードできますよ。実習生の方はぜひ覚えてください。評価の観点及びその趣旨というのでググっていただくと、文科省から出ている各教科の中学校の主体的に学習に取り組む態度というのは実はどんな趣旨なのかというのを書いたPDFが取れます。そこに数学は明らかに数学的な証明の修正・改善と書いてありますよね。数学は非常に分かりやすいです。

本校は、その前段の論理的・統合的・発展的を使っていますけど、ぜひこっちの修正・改善を使ってみてください。本校は一部ルーブリックだけど、「見方・考え方」をもちろん使っていっぱいやるのですばらしいんですけども、この修正・改善的な主体的に学習に取り組む態度の観点がちょっと少ないんですよ。思考・判断・表現の観点が多いですよ。それは全然構いませんけれども、これからやっぱり主体的に学習に取り組む態度の観点の研究をして、それを自己評価ルーブリックに入れてほしい。そして修正・改善。ほかの友達の証明と比較して、より高度な、別解でもきちんと粘り強く取り組めるように修正・改善。だから、直したところは消しゴムで消さないで、プロセスを記述してほしいわけだから、間違ったところは残しておいてというやつです。そして赤ペン添削を自分でやって、友達からの添削をまた青ペンでやってとか。そのプロセスを全部残しておくんです。そうすると、この観点で主体的に学習に取り組む態度の自己評価、相互評価、教員からの要録に生かす記録に残す評価にも使えますよ。こういったことで、数学は結構面白い。修正・改善が入ってきました。これはすばらしいです。

理科、これは石川県です。石川県も公立の中学校が全国学力調査で日本一に時々なったりして、福井県や秋田県を脅かしていますが、それには理由があるんです。私も昔、全国学力調査の国の委員を12年間やってきましたから、こうやって石川県も取材に行きました。今、秋田、福井、石川は学力トップ御三家ですよ。それを調べていくと、私も「学力アップの法則」という本を出していますが、やはり理科でもこういう実験報告レポートというのを学期にできたら1枚、難しいですかね。教科書にも入っていますけれども、教科書は年間に1枚ぐらいですか。できたら学期に1枚。これを理科室に貼ってあるんですが、もう今ベストノートの添削結果の貼り出しなんてどこでもやっていますから、新しくありません。これは理科実験報告書のベスト報告書を添削して赤字で価値つけて貼るとというのが結構新しく、石川県はこれをやっているから日本一になりました。

日本一になるときの理由は明らかです。理科は3年に1回なんですけど、私が提案したんですけど、私が言ったら通ってしまいまして、某政党が政権を取ったときの方が、女性の議員でしたけど、「2位じゃ駄目なんですか」と言った方ですが、「もう学力調査なんてやめてしまったらどうですか」と言ったので、「いや、それはちょっと困るので、オリンピック形式のように4年に1度でいいからやらせてくれませんか」と言ったら通ってしまいまして、3年に1度になりました。すみません、先生方はやめてほしかったと思っているかもしれませんが、私のアイデアで3年に1度で入ってしまいました。

それで、理科もこういうふうに理由や根拠を明確にして、こういうふうに結果から考察をしっかりと書いて、説明ができるように書いているところに価値づけをしています。こういうふうな理科の3年に1度の大問作りがあるわけですが、前は難しかったです。平均正答率が国レベルで18%なんていうとっても難しい問題を出しましたけど、こういうことができるのであれば解けているんです。全部これは「深い学び」の私の技法の20個のうちの2つ、3つが入っているわけです。ですから、「見方・考え方」は大切ですが、この学びの技法20というのは学力テストでの成功法則も入っているわけですね。

石川県の先生方はこういったことをやっぱり丁寧にやっています。これは公立の普通の中学校です。こういうのをやるから理由や根拠を明確に、既有知識を活用しながら、データから考察した結果を書いて、仮説の検証をちゃんとできている。深い。こういったことがしっかりと価値づけられています。ルーブリックもこういうふうにしっかりと探究的な学び、理科は明らかに評価の観点のその趣旨で科学的に探究する態度と書かれてしまっていたから、必ず主体的に学習に取り組む態度のルーブリックには、探究的と粘り強さと、私は主体的な取組を入れますけど、ジーマーマンの理論でいくならメタ認知的モニタリング、メタ認知とかを入れてもいいかもしれません。自己評価とかね。しっかりと自己の学習状況を把握しているって、ここはいろいろです。学校で工夫してみてください。こういうルーブリックでやっているということです。

美術なんかはこういった作品レポートみたいなものを必ず書かせますよね。これは山梨県の中学校ですけど、レタリングのときの作品説明文ですけど、これをちゃんと主体的に学習に取り組む態度で評価をできるわけです。

こういうふうにして主体的に学習に取り組む態度のほうでやるか、思考・判断・表現のほうでやるかは先生方にお任せしますが、こういうルーブリックが明確になることで身につけるべき資質・能力が明確になる。そうすれば学習をする意義というものも分かってきます。中学生は、「先生、なぜ勉強するのか分からない。」とよく言いますが、「資質・能力を身につけたら、みんなの未来の可能性が広がるからだよ。自分で可能性を広げようね。」と言って説得するのが新学習指導要領に基づく説得の仕方だと思いますけど、いかがでしょうか。今日は評定の話はしませんので、こういうことなんですけれども、とても説明がしやすくなる。

ただ、問題があって、ルーブリックだって完璧じゃありません。AとBの間、微妙なところがありまして、グレーゾーンを排除できないです。しっかりと書けているとか論理的

に書けていると書けば曖昧性がかえって残るので、つけにくくなったりします。その辺の課題解決、問題解決の仕方は本に詳しく書いてありますので、また読んでいただくことにしまして、問題点も残ります。完璧にとは言えません。でも、今はループリック以上に、はっきりと期末考査や中間考査のようなペーパーテストで測れない資質・能力を、ある程度の高い信頼性・妥当性を担保して、保護者、生徒に説明責任を果たせる評価の手法って、まだループリックしかないんですね。

C h a t G P Tで再現するG P Tをずっと私は開発していますがけれども、それもC h a t君にちゃんとループリックを読み込ませないと、C h a t君は「評価規準を教えてください」と言いますから、ループリックはどっちみち要るんですね。曖昧に評価はできませんので。

留意点は、ちょっと私も研究していないのは、このC評価をつけちゃいそうな生徒さんを早く見つけて、個別の指導でBに上げたりするような取組が必要になりますけれども、このあたりもちょっと丁寧な議論が必要ですので、今日はお時間が来ていますので十分話せないのが申し訳ないですが、本に詳しく書いてあります。

このタブレットは、私は研究して本を2冊出しているわけですが、この課題解決的な本校のような流れの中で、特に今日は7番と9番のように、評価履歴としてしっかりと蓄積して自己評価、相互評価にI C Tを生かすということで使ってほしいということです。特に真ん中のボツにある生徒の自己評価、相互評価も含めて使ってほしい。じゃ、どうなのか。

これは埼玉県の私が尊敬するある中学校、高校の先生なんですが、これはチョウチョウが握り潰されてしまうという、高校の教科書に載っている話ですが、それでグループごとに自分たちの個性的な読みの課題というのを設定させて、これは個別最適というより班別最適な学びということで、グループで固有の、なぜエーミールはチョウを握ってしまった僕に対して軽蔑するまなざしを向けたのだろうかとか、そういう問いを作って、その解決をして、発表して、相互評価のものを、これはベネッセのオクリンクとかを使っていますが、カード形式でクラウドにアップして評価していくというオンライン使ったシステムなわけですね。

いろんなやり方の手引は紙でも印刷しているけど、P D Fで全部アップしています。「先生、紙はもう要らないんじゃないですか。」と言ったら、「生徒の中には二、三人紙がいいという生徒がいるんでね。」という大変生徒思いの優しい先生でした。こういうふうに学習

の手順カードも全部オンラインに上げています。ループリックも全部オンラインに上げています。紙が必要だと言う子だけ二、三人に印刷してあげている。いろんな学習のときの手順とか観点とかも全部オンラインで見られるようになっていきます。グループのメンバー表とかも全部入っていて、これが各班の個性的な読みの問いですね。本を読む問いですね。似たようなのもちょっとありますけど。かぶっているのもありますが、7グループぐらいですか。それを解決したことをグループで発表し、結論を出し、それが一部間違っているのであれば反論していくんですが、今日の理科のように丁々発止でクラス全体ではなく、小グループでの協働的な学びを入れながらやります。そして、ループリック表を見ていますよね。ループリック表を見ながら、オンラインのカード、デジタルカードといいますか、何とかポケットカード、これに書いていって点数をつけていくわけです。A・A・Aでもいいし、3点・3点・3点、9点とかと点数をつけていくんです。そして、どんどん書き込みをして、それをどんどんそのグループに対して送ります。「送ったよ」とか「来た？」とかと言いながら、「もらった。ありがとう」とか言いながら、こうやって観点別点数と自由記述で。

先生からも、生徒がうかうかしていると、「この観点で評価してあげた人いる？みんな何かぼーっとしてない？」とかと言って、チョコちゃんみたいな先生が出てくるわけです。この辺が先生からの価値づけといいますか、丸投げで何でもいいんじゃないんです。やっぱり価値のある深い相互評価になっていなければ、先生からも「ちょっと6班に対する疑問点があるんだけど。」なんて言って、それが教師の出番ですね。ふだんは——自立的な学びと今度は文科省が言うそうですが——自立的な学びのときには先生はあまり講義したり板書したりは減らして、手引があるので、手順カードがあるので、評価基準もあるので、そういう学びの道具立てはもう全部用意しているから、自分たちでグループでやりなさい。でも、先生はぼーっとはしていません。鋭い、生徒が言い忘れたようなことをささっと書いて、ぼーんと送ります。ここがプロ教師の出番です。ふだんは****だけしているように見えるんですが、ここで出番で、生徒がドキッとします。これは面白いですよ。

もっと面白いのが、真ん中の女子生徒さんは発表していたグループの誰か一人なんです。発表していた6人ぐらいで、各班に1人ずつアウェーが入ってきます。だから、この女の子は違うグループの6人ぐらいに囲まれて、アウェー感満載で反論しなきゃいけないんです。「君のこの解釈はちょっと違うと思うんだけど、叙述に即して言えばこういうふうな解釈が成り立つと思うけど、君はそれを発表していなかったけど、どう？」とかといって右

の男の子に突っ込まれていました。そしたら、その女の子は反論していました。「いや、叙述では言えないところもあって、想像読みをしないと分かんないんじゃないでしょうか。」とか、なかなか議論が白熱していました。

そんな形で、アウェー感満載の中でもきちんと自分の根拠の正しさを説明するというかなり厳しいトレーニング。通常の公立校ですよ。こういう協働的な学びで、個の学びじゃないけど班の学びを鍛えていっています。こういうことを集団といいますか、班と集団といいますか。集団の学び合いというのは、文科省が最近、令和の日本型学校教育の報告書で述べた個別最適な学びと協働的学びを一体的にというのは、関連づけて学ばせてください、充実させてくださいと言っているということですね。

ということで、いろんなグループがアウェー感の子たちにも優しく語りかけます。厳しく語りかけちゃ泣いちゃうかもしれませんね。ということで、でも本当に温かい雰囲気の中で、学級経営にもなりますから大丈夫。

ということで、また最後に学んだことなんかも記録に残す。こういった形で履歴に残す。記録に残す。オンラインで残るので、最後の単元のまとめも、また振り返りも、きちんとエビデンスに基づいた「深い学び」の結果が残っていて、自己評価が深まりますよ。ぜひ本校だけでなく、先生方もやっていらっしゃったら素晴らしいですが、もしやっていらっしゃらないようでしたら、クラウドを使ってこういう評価履歴ということもしてください。

これは福島県のある中学校で見てきたんですが、技術・家庭科の時間で3年生がロボットのプログラミングをしますよね。技術・家庭科の先生、今日は幼児とおもちゃの講義でしたけれども。このプログラミングで、音が出たり、色がついたり、いろいろ動いたりするんですが、これは先生の説明です。それを一人一人プログラミングして、ブロック型で、動く、動かない、いろいろやっているわけです。これは中間評価です。「どうした？動いてる？」とかと言いながら報告しています。そのときにタブレットがあるので、自分の画面をスクショを撮って自己評価カードに貼り込んでいるんです。スクショを撮って自分の学習カードに貼り込んで、オンラインにアップして、右側に文章を書いていますよね。それをみんなで見合って、でも、今日は相互評価の評価セッションなので、直接見ればいいんだよね。家で家庭でやったりとか隙間時間でやったりすることもオンラインであれば可能です。その辺は先生方にお任せします。

そして、どうやったら動くようになるのかというのを相互修正。学習改善ですね。まさにこれが学習改善。毎時間ああやってスクショを撮って、プログラムのブロック型の写真

で残すから、「ここを修正したらいいよ。」「このワンブロック抜けてるよ。」とかというアドバイス合戦がしやすくなる。「ああ、動いた、動いた。」というわけです。「ありがとう。」とか「ここ修正せんなんね。」とか、こういう協働的な修正行動というのが非常にしやすくなりますし、記録にも残っているので、こうやって文章と図を一体的に履歴に残す。オンライン、タブレットによるクラウドカードを、どこの会社でもいいです。MicrosoftのOffice365でも何でもいいです。こういったものを、これは技術・家庭科ですが、本校は体育でもやっていらっしゃるから、いろんな教科でこういったことが繰り広げられて、また最後のレポートに生かしていく。それをまた先生が主体的に学習に取り組む態度でつけていく。非常にエビデンスベースで、ループリックは、この学校は始めたばかりなのでまだ1観点しかなくて、ま、これからですね。実態そのものをそのままお見せしますけれども、3観点3レベルまでなっていませんけれども、これからでしょうか。

これは別の学校の体育ですが、議論があるかもしれませんが、ダンス領域で女子のグループの体育でした。中2ぐらいでしたかね。中間評価会という。探究的な学習って必ず中間評価会、発表会とかを持って、学習改善・練り上げ・修正というのをできたら1回入りたいですね。時間がないから、なかなか。総合的な学習の時間でしかできないこの中間評価発表会というのを体育でやって、Google Jamboardでお互いにカードをもらえて、修正・改善行動に生かしていくという授業でした。

ただ、体育は運動量が65%ですか、70%ですか、未満になると、運動量低下でよくないと言われますので、ぎりぎりです。いろんな動きのあるスポーツを模写するようなダンスにおける授業でした。もうビデオをお見せする時間がないんですが、ちょっとデフォルメしながらということもありますが、私は専門が体育じゃないのでよく分かりませんが、時間の工夫、空間の活用、集団での動きの工夫ですね。こういったものが「見方・考え方」に体育ではなるんでしょうか。これをしっかりと押さえた上で、Google Jamboardで評価を。観点はあまり細かく出していないですけど。だから、ここはループリックじゃなくて、こういうフリーカードのような形でやっています。なかなか上手でした。

こうやってもうぱぱっと評価して。だから、鑑賞している子たちがタブレットを持っているので、ささっと慣れたもんですよ。もう本当に20秒ぐらいで1枚書きますから、2、3枚ぱぱっと書いて、1分ぐらいですよ。それ以上与えると運動量が減りますから。それでぱぱっと****出して、ぱーっと集まっていくんですね。これで何人かの子に評価を言ってもらって、また受け取ったほうはどれもとてもしっかり評価を受けた。いい評価という

のは鋭い評価を受けたので、次のパフォーマンスの改善に生かしていきますという。中間評価ですから学習改善しやすいですね。ちょっと猫背なのが嫌ですけどね、まあ、まあ。体育ですから、この辺はやり過ぎは禁物です。ですから、本校の体育の松田先生はこれを教室に戻ってやっていたらしゃる。何がいいかはお任せします。

最後の事例が、これは新潟市のある中学校で、生成A Iによる自己評価、相互評価なんです、この授業は総合的な学習の時間です。1年生です。福祉単元です。地域の福祉のことをいろいろ調べて、最後、新聞にします。ただ、これは私の研究で、大きい新聞も今作るのはとても難しいので、はがき新聞という小さい、150字ぐらいでイラストも入れられる短作文ですけど、そういったコンパクトな新聞で、短文でしっかりと要約しながら自分の学習成果を書いていく。そんなはがき新聞でつづっていくということをやっているんですが、実はC h a t G P Tの有料版を早稲田と新潟市さんの教育委員会で協定を結びまして、アカウントを7つ提供しています。グループに1つずつアカウントをプレゼント。ここは内緒の話なんですけど、C h a t G P T有料版は、1個のアカウント、1か月に3,500円ぐらいですね。5、6人の子が共同利用が異なるタブレットから同時にできるんです。これをO p e n A Iは言っていないので内緒なんですけれども、できるんですよ。だから、1つの班にアカウントが1個あればできます。ただ、だからといって7つ、月に $7 \times 3 = 21$ 、2万円、年間20万円、25万円、学校では無理ですね。ぜひ早稲田大学と業務提携させてください。ご提供いたしますよ。

ただ、これがほぼ無料に近い形で教育委員会さんが買い上げる時代が来ました。今日ニュースに出ていました。O p e n A Iが学校関係はスペシャルカウントダウンプライスでO p e n A IのC h a t G P Tバージョン4を提供する。実際幾らになるかはまだ社長さん、あると思いますが聞けませんでしたけど、今、1アカウント月3,500円でしょう。多分500円ぐらいなんじゃないかと思います。分かりませんが、アルトマンちゃんに期待しましょう。岸田総理大臣と仲がいいのでね。サムは仲がいいので500円にしてねとこれから言ってくれるといいですね。岸田総理大臣は早稲田の修了生でございますので、早稲田パワーで頑張ってくれると思います。

こうやって書いた新聞をP D FでC h a t 君に読み込ませると、びっくりです。今C h a t 君は賢いので、アドバイスコメントを一人一人にくれます。すごいですね。だから先生は評価していません。C h a t 君が評価しています。そのためにはループリックと評価の目的とかアドバイスのポイントとかを事前に入力しておく、こうやってタタタッと

一瞬で書いてくれるので、それを先生は印刷するだけです。実際これは印刷しなくても、コピペでPDFにして子供に渡してもいいんじゃないですかと言ったら、今年度そうしますとかと言っていました。でも、生徒もこういうのをもらうとうれしいですよ。Chat君から返事が来た。「え、AIが返事くれるの？私の作文に」。「もうちょっとグラフを入れないと、エビデンスがなくて説得力低いよ。」とか、結構有料版は大学の教授と同じレベルの知的能力があるので、もらった生徒は真剣になりまして、「早く推考してしっかりしたのを書こう。」と。だから、個人チューターがクラスに35人いると思ってください。

先生方は喜んでいました。だって、総合って福祉がテーマ、防災がテーマでしょう？専門の先生はいないじゃないですか。それを40人分レポート評価しろって、また2日も3日も取られるでしょう。働き方改革に逆行しますよ。でも、ChatGPTにPDFをぽんぽんっと読み込ませて、ぱっぱっぱっぱっと出力して、それを生徒にコピペで返すだけですから、1クラスぱっとやるので、1時間じゃ済まないけど、1時間半ぐらいでしよかな。楽です。こういう形で。

そのChat君で修正したやつ、修正・改善が粘り強くできたら、主体的に学習に取り組む態度ができたと言っているわけですから。友達からまたそこに褒め褒めコメント、これはロイロノートですね。新潟市はロイロノートなので。それをもらってうれしくて、またもちろん改善課題が出るかもしれません。こういう形でオンライン上での相互評価、人工知能も交えた修正・改善、練り上げ、推考、こういったものもまたできるようになります。

ちょっと宣伝で申し訳ありませんが、そういったあたり、ご利用になりたい方はこういった本もございますので、アマゾンでググっていただければと思います。いろんな評価の今話したことがまとまっています。整理していますので、後ほどご覧いただいて。宣伝がちょっと激しくて申し訳ありませんが、今日話したことはこの黄色い本にも書いてございます。これが先月出たばかりの主体的に学習に取り組む態度のルーブリックの活用例、5教科ですけども豊富な実践事例が出ておりますので、ぜひこれでまた学習を深めていただけるとありがたいと思っています。いろいろございます。

どうもご清聴ありがとうございました。(拍手)